

(論文)

ナルニア国年代記『ライオンと魔女』における、 アスランの贖いの意味—その、神学的含蓄について

本 多 峰 子

1 問題の所在

C. S. ルイスの『ナルニア国年代記』シリーズは、7冊からなり、別世界の国ナルニアの創造から終末までの歴史のエピソードを描くファンタジーである。創造は第6巻『魔術師の甥』(*The Magician's Nephew*)に、終末は第7巻『最後の戦い』(*The Last Battle*)にある。その第1巻、『ライオンと魔女と洋服ダンス』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*—邦訳は、瀬田貞二訳『ライオンと魔女』¹)で、日本ではこの名で知られるので以降、本論でも瀬田訳の題を用いる)は、次のような物語となっている。

ある日、イギリスの田舎に疎開に来ていた4人の子どもたち、ペベンシー (Pevensie) 家のピーター (Peter)、スーザン (Susan)、エドモンド (Edmund)、ルーシー (Lucy) の4人兄弟が、ふとしたことから魔法の衣装ダンスを通して別世界の国ナルニアにやってくる。ナルニアは、創造主であり、海の向こうの皇帝のむすこであるライオン、アスラン (Aslan) に創られた平和な国であったが、すでに長年白い魔女 (the White Witch) に支配され冬に閉ざされていた。アスランも、ナルニアにはいなかった。4人の中で最初にナルニアに入りこむルーシーと、上の2人ピーターとスーザンとは、アスランが助けに来てくれることを信じる良いナルニア人達の側に着くが、3番目のエドモンドは、砂糖菓子に釣られて兄弟を裏切り、魔女の下に走る。エドモンドは知らなかったが、ナルニアには太古の昔から、「アダムの息子が2人とイブの娘が2人、[ケア・パラベル城の] 4つの王座に座るとき、そのときこそ白い魔女の支配は終わり、彼女の命も終わる」(p. 77)²という予言があった。魔女は、ペベンシーの兄弟によってそれが現実になることを恐れ、エドモンドをおとりにして4人すべてを手中におさめ、殺してしまおうと考えているのである。しかし、アスランが動き出し、魔女の支配が危うくなると、彼女は、4つの王座を埋めないためにエドモンドを殺してしまおうとする。そして彼が魔女に殺されそうになった時、アスランは自ら身代わりになることを申し入れ、エドモンドを救って殺される。しかしその後、アスランは復活して、回心したエドモンドを含む4人

の子どもたちと共に魔女を滅ぼし、子どもたちは4つの王座について、ナルニアを平和に治める。そして、長い年月が経ち、ある日また、彼らはタンスを通して人間社会に戻るのであるが、人間社会では彼らがナルニアに行ってから数分も経っておらず、彼らもまた、ナルニアに行った時の子どものままに戻っていた。

キリスト教の教義を知っている者はしばしば、この物語が、イエスの受難と贖罪の物語のアレゴリーであるかのように感じる。キリスト教の中心的教義は、神がイエスに受肉して、救い主として、十字架の死によって人間の罪を贖い、3日めに甦ったことによって人間に救いをもたらしたというものであり、アスランがエドマンズの代わりに殺され、甦ってナルニアに救いをもたらしたことは、それに並行する筋書きだからである。ルイス自身は、『ナルニア国年代記』はアレゴリーではなく物語はすべて心に浮かんだ魔女やフォーンのイメージから始まったと言う。いわば、「すべては絵で始まった」のである³。『ナルニア国年代記』は、何よりも想像力の産物であり、理性によって構築されたアレゴリーではない。ルイスは、ある子供にこう書き送っている。

わたしは「わたしたちの世界にいらっしゃる本当のイエス様をナルニアで、ライオンの姿で書いてみよう。」と思ったのではないのです。わたしが考えたのは、「ナルニアのような国があったとして、そこで御子が、わたしたちの世界で人間になったように、ライオンになったとしたらどんなだか、《仮定して》みよう。そして、何が起こるか想像してみよう。」ということなのです⁴。

「すべては絵（イメージ）で始まった」という言葉はルイスの批評家の間ではあまりにも有名になってしまったので、あたかもルイスが自分の創作活動に道徳的動機がまるで無い様に言っているかのように書いている研究書もある⁵。しかし実は、ルイスは、自分には上で述べたような道徳とは無関係な作家としての衝動に加えて、道徳的人間としての衝動があることを次のように断っている。

そして、もちろん、私のなかの「人間」の番がきました。私はこの種の物語に、子供の頃に私の宗教〔キリスト教〕を麻痺させたある種の抑圧をすり抜けさせるすべが分かったと思いました。神について、またキリストの受難について、こう感じなさいと言われると、かえってそのように感じるのが難しくなるのはなぜでしょうか？ 主な理由は、こう感じなさいと言われることにあるのだと思いました。こう感じるべきだという義務感には、感情を凍らせてしまう力があります。[…] しかし、もしも、こうしたことをみな想像の世界に投げ込んで、ステンドグラスや日曜学校の連想を剥ぎ取ってみれば、これらは初めてその本来の力を見せてくれるのではないのでしょうか？ […] そう出来ると思いました。それが人間としての私の動機でした。⁶

それゆえ、ナルニアのアスランの死と贖いの行為に、キリスト教でのイエスの死と贖いの意味についてのルイスの理解が表されていると考えることは的外れではないであろう。あるいは、少なくとも、キリスト教でのイエスの贖罪の意味についての理解のひとつの可能性が

提示されていると考えることは可能である。

キリスト教では、使徒信条に、「主は […] 苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座し給えり」とあり、この死と復活によって人間に救いがもたらされたという教義は、カトリック、プロテスタントを問わず使徒信条を受け入れるすべてのキリスト教教派に共通している。しかし、その贖いがどのように行われたか、いかにして、彼の死と復活が贖いとなったのかについては、さまざまな理解がある。また、神が全能であれば、なぜ、神は人間の罪を赦すのにただ無償で赦すのではなく、イエスの死を必要としたのか、というある意味で素朴な疑問に対して、様々な答えの試みがなされている。本論では、この2つの問い、すなわち、イエスの死がいかにして贖いとなったのか、そして、なぜ、彼の死が必要であったのかというキリスト教の問いとその答えに照らして、ナルニアの場合のアスランの贖罪の過程と意味、そしてその死の必要性について明らかにしたい。

そのため、第一に、キリスト教における主な贖罪論を確認し、第二に、エドモンドの贖いとなったアスランの死の意味についての先行研究者の見解を見る。そして、結論部で、先行研究との対話を行いつつ、キリスト教の様々な理解に照らして、『ライオンと魔女』の場合、アスランによる贖罪は、どのように考えることが最も適切か、答えを見出したい。

2 贖いの語義的意味。いくつかの可能性。

マルコによる福音書 10 章 45 節によると、イエスは、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」と言っている。この「身代金」λύτρον (*lytron*) という語は様々な解釈が可能である。TDNT によれば、これは語源的には λύω “to lose” (解く) から来ており、主としてヘブライ語の 3 つの語、すなわち כֶּפֶר (*kōper*)、גֹּאֵר (*go'ēr*)、פְּדִיּוֹן (*pidyôn*)⁷ の相当語として用いられる。

第一の כֶּפֶר は、もともと「覆う、覆い隠す」(to cover) の意味であり、その意味は犠牲の祭儀などに残っている。この意味では、כֶּפֶר は常に、過失と等価であることを含意し、身代わりの思想と結びついた。そこから、罪の贖いとして犠牲にされる、罪の重みと等しい価値を持つ身代わりの生け贄を כֶּפֶר = λύτρον というようになったのであるが、この λύτρον で贖われるものは常に、人間の命 (ψυχή) である。

גֹּאֵר の訳語としての λύτρον は、家族法の概念であり、捕われたり他人の手に落ちた家族の命や財産を近い肉親が贖い取り戻すための身代金や請け出し金の意味で用いられる。פְּדִיּוֹן は囚人や捕虜を贖うためのもので、贖われるものは動物や人間など、生物に限られる。גֹּאֵר と異なり、これは、家族法の概念ではなく、支払いがなされるかぎり誰が支払いをするかという問題はなかった⁸。

パウラーによれば、ギリシア語の λύτρον はもともと人を解放するために支払われる金、とりわけ、戦争捕虜や奴隷や負債を抱えた人を解放するために支払われる金を意味した⁹。特に、1 世紀のパレスチナにあっては、この語は、奴隷を贖い自由にする身請け金を指し、その文脈で理解されることが多かった。マルコ福音書の文脈でも、ἀντίを「～の代わりに」と、交換の対象を表す意味で取って、身請け金との意味で λύτρον を理解することは自然であろうとも指摘される¹⁰。それゆえ、イエスが自分の死を「多くの人のための身代金」と言っ

た言葉はこの文脈だけでは、罪の贖いのためという意味には限定できない。たとえば、イエスは多くの悪霊祓いを行っており、それをバルゼブル (=サタン) との戦いと見る発言も (cf. マルコ 322-27) イエスの言葉として記録されている。この文脈で考えれば、彼の言う「身代金」は、悪霊の頭サタンに捕われている人々の解放のための代価とも考えられる。

3 キリスト教におけるイエスの贖罪理解

キリスト教の教義学では、ひとつの答えとして、イエスの死を神に支払われる贖罪の代価と見る解釈が、4世紀アレクサンドリアのアタナシオスや、代表的には11世紀カンタベリーのアンセルムスによってなされている。アンセルムスが1098年に著書、『なぜ神は人に?』 (*Cur Deus Homo*) で述べた贖罪論によれば、人間は罪を犯し、正義の神はそれを無償で赦すわけにはいかないが、人間は罪を犯して堕ちているので償いをする力がない。人間の罪を贖えるのはキリストだけである。それゆえ、彼の死が人間の罪の赦しには必要だったのである¹¹。神であり人でもあるキリストだけが、その神性によって贖いに十分なものを神に賠償することができ、また、その人性によって、人間の代表として罪の贖いをする事が出来るからである¹²。

しかし、「なぜ神は罪の贖いのためにイエスを殺さなければならなかったのか」、との問いはそもそも、贖いの身代金を求めるのが神であるとの前提に立って初めて生じる問いである。旧約聖書で罪の贖いが必要とされる時、贖いの供物や犠牲は必ずしも、神の怒りをなだめるためとか、神の赦しを得るためになされるとは限らない。アタナシオスやアンセルムスより何世紀も前、2世紀後半のギリシア教父エイレナイオスは『異端論駁』 (*Adversus haereses*) (V. 18-20) で、イエスが十字架で捧げた命を、背徳者サタンによって束縛されている人間を解放するための身代金と理解しており、そのようにとる理解は後世、イエスの地獄下り—イエスが死んで黄泉に下った3日間の中に、黄泉でサタンの捕囚になっている者たちを解放した—の民間伝説にも発展している¹³。

また、キリスト教の代表的な教義ではないが、人間が罪を犯した時に、その罪の結果として必ず生じる禍からの救いとのかたもありうる。クラウス・コッホによれば、旧約聖書に見られる応報の思想は、罪に対してヤハウエが罰として禍を課すというよりはむしろ、悪しき行為にはすでに内在的に禍の芽が含まれており、その自然な結果として必ず禍が起こるのだとの思想である¹⁴。これは、神義論で問われるような、罪を犯せるように人間を作ったのは神であるのに、神は罪を犯した人間を罰し滅ぼすのかとの問いとかかわる問題である。

コッホは、箴言の

1:18 待ち伏せて流すのは自分の血。隠れて待っても、落とすのは自分の命。

19 これが不当な利益を求める者の末路。奪われるのは自分の命だ。

5:22 主に逆らう者は自分の悪の罠にかかり、自分の罪の綱が彼を捕える。

論しを受け入れることもなく、重なる愚行に狂ったまま、死ぬであろう。

10:29 主の道は、無垢な人の力、悪を行なう者にとっては滅亡。

12:2 善人は主に喜び迎えらる。悪だくみをする者は罪ありとされる。

などの個所に言及し¹⁵、これらの個所では神の「罰」ということは全く語られておらず、むしろ、「閉じた〈行為-結果 構造〉」¹⁶が前提されていると読んでいる。罪の結果の禍が罪を犯した人間に降りかかる際に、ヤハウエの業は、「人間の行為の結果を動き出させることにある。[…] 国民は自らの行為の種をまき散らし続け、ヤハウエはそれらの行為の実が熟し、収穫が実ることを許すのである」¹⁷と彼は論じ、報いとも訳される עֲקֵב ('ēqeb) (箴言 22:4¹⁸ など) は、「結果」と訳すほうがよいと述べている¹⁹。

さらにコッホは、ファルグレンの研究に依拠して、ヘブライ語の一連の単語においては同一の語幹が行為とその結果の両方を表すために用いられていることを指摘している。「ra' (עַר) には『道徳的に墮落している』という意味と『不幸をもたらす』という意味の両方があり、חַטָּאת (ḥattā't) は『罪』(sin) と『災厄』(disaster) の両方を意味する²⁰。しかも、ゲゼニウス、ブル、ケーニヒなどの辞書に当たる限り、ヘブライ語には「罰」(punishment) に相当する語がない。コッホによれば最もそれに近い意味を持つのは、חַטָּאת であるが、これは特に「罪」を表す語でもある。同様に、正義を表す צְדָקָה (ṣēdāqā) も、罰を下すことではなく、「報いを与えること」を表す²¹。

このコッホの指摘が正しいとすれば、旧約聖書の神は律法違反に対して「罰を与える」神ではないということになる。たしかに、旧約聖書の応報思想を明らかに示している申命記 11:26-28 でも、人々が自分たちの行為に応じて祝福あるいは呪いを受けるであろうことが言われているが、それらの報いは、神が能動的に作用して与える報奨や罰であるとは言われていない。「私は今日、あなたたちの前に祝福と呪いを置く」(11:26) とは、人々に神が自由な選択を与えるということ、「あなたたちは、[…] 主の戒めに聞き従うならば祝福を、もし、あなたたちの神、主の戒めに聞き従わず、[…] 他の神々に従うならば、呪いを受ける」(11:28) とは、その結果彼らが自分たちの行ないに当然伴う結果としての祝福や呪いを得るであろうことを告げているとも読めるであろう。しかしここまでの考察に限って結論するならば、やはり、ヤハウエを創造主として、そして、すべてを統べ治める神として信じる限り、人々が神に従えば祝福を、従わないならば呪いを受けるように道理を定めたのは究極的にはヤハウエということになり、ヤハウエが報いや罰を与えるということと本質的には変わらないと言うことができよう。違いは、応報が内在的に行為に組み込まれている場合には、一見、ヤハウエが呵責ない裁き手ではなく、恐ろしい神ではないかのように見えることである。しかしその場合、もし、ヤハウエがそれに対して何も救いを差し出さないとすれば、実際は、「行為が自動的にそれにふさわしい結果を引き起こすというような、神との人格的な交わりを欠いた機械的な法則」²² になってしまうだけであり、ヤハウエの慈悲や救いが認識されることにはならない。これは、神の歴史への介入を創造の時点に限ってしか認めない理論論のような見方である。

それに対しコッホは、詩編をとりあげて、人間の行為の結果が生む報いについて、善行についても悪行についても、それらが「行為に内在的に埋め込まれている結果」として表されていることを指摘すると同時に、詩編作者はしばしばヤハウエに対して、自分のことや、敵のことを「心にとめてください、覚えていてください」(25:7; 4:18, 22; 79:8; 137:7 など)²³ と


祈願するが、これは、自分が受けるべき報いや敵にふさわしい罰が実現するのが、ヤハウェに覚えられていてこそであり、機械的に起こることではないとの思想の表れであると論じている。そこから、「私の若いときの罪と背きは思い起こさず、慈しみ深く、御恵みのために、主よ、私を御心に留めてください」(25:7)との祈りも可能になる。神が忘れてくれることによって、罪咎に内在する悪い結果が実現することが防げるのである。罪は人間の側の責任であり、そこから起こる結果としての災いは自分の犯した悪しき行為に内在する結果である。ヤハウェの与える罰ではない。善の報いも同様である。ただ、その内在的結果が現実化するためには、ヤハウェに覚えられていることが必要であるという点において、ヤハウェは罪の結果としての災いに重要な役割を果たすのである。しかしこのことは逆に、ヤハウェにはそれを非現実化のままにとどめる可能性のほうをむしろ現実となす力もあるということであり、ヤハウェは、その与える赦しによって、人々が本来被るべき罰としての災いを免れることを可能にする慈しみ深い神、救いの神だと考えられている。

フォン・ラートも、旧約の世界観において罪からその結果に至るすべてが一つの悪ととらえられており、ことさら罰だけがあとからヤハウェによって課せられた正義の裁きとは考えられていなかったと見ている。フォン・ラートによれば、אֲדֹנָי אֱלֹהֵינוּ (ādōnāy) も、意味論的には、行為として(罪責として)の罪とその結果である罰のどちらをも表すことができ、罪と罪責とを区別する考え方が旧約聖書の思考と合わないのである。たとえば、弟アベルを殺したカインが自分の עֲוֹן (āvōn) は担いきれないと言ったとき(創世4:13)、そこに、罪責を考えているのか、罰を考えているのかという区別はまったくされ得ない。カインは彼の行為から放浪に至るまでの複雑な悪のすべてを見て、あまりにも重過ぎると考えているのだと、フォン・ラートは指摘している²⁴。彼によれば、罰はヤハウェの義によって与えられるものではない。イスラエルに与えられる צְרִקָה (zəriqā) は常に救いの賜物である。罰を与える צְרִקָה (zəriqā) という概念の例証はない。それは形容矛盾なのである²⁵。

コッホの理解は批判もなされており、たとえば、コッホは自説に都合の良い箇所にものみ注目している、と指摘して、旧約においてヤハウェが罪の罰を与えることが明白に示されている個所を示す研究者もある²⁶。実際、士師記3:8、列王記II1:9-11など、神が怒りをもって民を罰する例は見られ、旧約聖書の神概念は書かれた時代と著者によって必ずしも同一ではない。しかしそのような多様性の中で、コッホやフォン・ラートの言うことが妥当な場合も十分にあるとするだけ、コッホやフォン・ラートの論は説得力がある。

このコッホの主張、すなわち、禍の神義論に顕著な応報の思想は、罪に対してヤハウェが罰として禍を課すというよりはむしろ、「閉じた〈行為-結果 構造〉」²⁷によって悪しき行為にはすでに内在的に禍の芽が含まれており、その自然な結果として必ず禍が起こるのだという思想なのだ²⁸、という主張が正しいならば、そして、マルコの描くイエスの場合にその思想と和合して、人間が犯した罪から生じる悪い影響や禍から人々を贖うのが彼の言う「贖い」であるとすれば、贖いの支払いを受けるのが神であるとは限らず、また、神が自分の受ける支払いのために御子を殺したと理解する必要もない。犠牲は神に対してなされるのではなく、悪の影響を断つため、と考えればむしろ神は、そのために自分の子を捧げるほどの信義を果たしていることになる。

また、罪が神から離れることであれば、イエスの死と復活が民を神のもとに取り戻すことになったことが、身代金の動詞(λυτρόμαι)にあたるヘブライ語の לָאָה (lā'āh) の意味の一つであ

る、「身代金によって取り戻す」という意味²⁹での働きをなしたと考えることも出来る。フォン・ラートは、のこの意味が「所有権請け出し、したがって古い所有関係の回復」であると指摘しており³⁰、この概念はマルコ 1:15の「悔い改めて（＝神に立ち帰って）福音を信じなさい」との福音使信と一貫している。この理解に立てば、神がイエスを民の身代わりに死刑にしたとは考える必要はない。そしてこの場合も、神は、自分の子を犠牲にしても民を取り戻し、民を救ったことになる。ヤハウエはかつて、イスラエルの父祖アブラハムに、イスラエルの民を自分の民とすると約束した。その約束を、ヤハウエは守ったのだと、考えられる。

4 アスランによる贖いと先行研究におけるその解釈

アスランもまた、少年エドモンドが兄弟たちを裏切った時、その罪の代償に、魔女に殺されることを申し出る。世の始めからの魔法があり、すべての裏切り者は魔女の合法的餌食となり、すべての裏切りに対して1回、魔女は殺しをする権利があるからである³¹。エドモンドの代わりに創造主であるアスラン自身が殺されることで、彼はその法を満たすのである。しかし、そこで、正義を守りつつそれを越える、愛の魔法が働く。すなわち、世の始まる前からの、より深い魔法があり、アスランが殺された時、世の始めからの魔法が書かれた石舞台（The Stone Table）が割れ、アスランは甦り、魔女は殺されてしまうのである。ナルニア国年代記の別の巻、『朝びらき丸東の海へ』（*The Voyage of the Dawn Treader*）でアスランは、「私が自分自身の法に従わないとでも思ったか？」と言っているが³²、ナルニアは秩序と正義の国であり、いかなる法、いかなる魔法もその性質に従って働くことを妨げられはしないながら、それよりもまず、愛の国でもあるゆえに、その法的秩序は、決して道徳的秩序を乱すことはないのである。

そして、『ライオンと魔女』においては、アスランが贖いの死と復活とを遂げることによって、善は悪に勝ち、われわれの世界におけるキリスト後の世界に対応する平和な世界が始まる。

ルイス研究者の解釈の中で、アスランの死と、アスランによるエドモンドの贖いの意味についてのひとつの代表的な見方は、エドモンドの死を、旧約の律法に要求される死と見て、アスランがその身代わりになったことを、キリスト教のイエスの十字架死と重ね合わせることである。

E. K. ギブソンは、石舞台に書かれた古い魔法の文字は、ルイスが『人間廃絶』（*The Abolition of Man*）でその存在を指摘している普遍的な道徳律（Tao）や、『キリスト教の精髓』（*Mere Christianity*）で論じている、「善悪の規則」the Rule of Right and Wrongであろうと解説している³³。ギブソンは、ルイスがこの、神の善悪の規則を、柔軟性がなく例外を認めない恐ろしい法であると考えていたと読んでおり、魔女が裏切り者の血を求めるのは、「法の要求」であると理解している³⁴。魔女は、「わらわが法の言うとおりに血を得なければ、ナルニアはすべて覆り、火と水のなかに消え去るであろう」と言うがそれは、ギブソンによれば、「血を流すことなしには罪の赦免はけっしてないからなのである」³⁵。ただし、ギブソンは法そのものと、法の要求を区別しており、アスランの死で果たされたのは、法そのものではなく、法の要求であり、この要求を、石舞台が象徴していたと説明している³⁶。

また、サモンズは、アスランを殺すのに用いられた石のナイフも旧約の法の象徴であると見做し、石舞台が二つに割れたのは、聖書でキリストの死の直後、ユダヤ神殿の天幕が二つに裂けたことを思わせると指摘している³⁷。

グラヴァもまた、アスランが復活した時、モーゼの石板のように正義の法が印してある石舞台の板が割れることは、愛の支配が呵責ない法の支配に取って替わることを示すとして、「憐れみの法が律法の魔法に打ち勝ったのである」³⁸と述べている。

5 アスランの贖いの意味についてのまとめの考察

このような解釈は、ユダヤ教の律法とキリスト教の贖いの教義を対峙させて、キリスト教がユダヤ教の律法支配を終わらせたとするキリスト教の優位を主張する優越的置換主義 (supersessionism) を読み込むことにつながりうるような印象を与える。しかし、その解釈は当たらない。第一に、アスランは、法を不要とは言っておらず、ギブソンも指摘するように³⁹、アスラン自身、古い魔法に対立して行動するつもりはないことを表明している⁴⁰。これは、福音書のイエスが「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ5:17)と言っていることと呼応する。アスランがエドマンズの身代わりに殺されるのは、古い魔法を成就するためであり、それを破棄するためでもそれを破るためでもない。ナルニアでは、古い魔法は時の初めから存在した。しかし、時の初めよりさらに前から、法の義をこえた魔法があり、それは、「誰か裏切りの罪を犯したことの無い者が自らすすんで、裏切り者の代わりに殺されたとき、石舞台は割れ、〈死〉そのものが逆戻りに働き始める」⁴¹というものであり、アスランの死は、その大きな魔法の成就の一部に取り込まれるのである。魔女は、復活のアスランに殺され、結局は、エドマンズの贖いと、この世の前よりあった古い魔法の成就に手を貸しただけに過ぎないことになる。旧約聖書の創世記3章の墮罪物語に発するキリスト教の教義では、アダムとエバが悪魔に誘惑されて罪を犯し、その子孫の人間が罪人となったために、神が人間イエスとして受肉し、罪を贖った出来事からのち、人間はイエスを信じることによって死から贖われ、アダムとエバが最初に与えられたいのちよりさらにすばらしい永遠のいのちを与えられると考えられているが、そこでは、悪魔は結局のところ、イエスの贖罪とキリスト教の救いに手を貸したに過ぎないことになる。ミルトンがアダムとエバの墮罪に材をとって書いた『失楽園』(Paradise Lost)についての講義でルイスは、キリスト教では、あらゆる悪は、おぞましいだけでなく嘲笑すべきでもあると教えられてきたと述べ、「悪魔は、(結局のところ)愚か者に過ぎない」⁴²と言っている。ナルニアでも同じことであり、魔女は結局、われ知らず救いの道具になってしまうのである。

ナルニアは悪い魔女に占領されていたが、彼女はその世界の支配者であり女王でありながら、アスランが知っていた古い魔法を知らなかった。それは、彼女が創造主でもなく、また、創造主なる神に正当に任命された本当の支配者でもなかったからである。彼女は、単に占領者に過ぎなかったのである。それは、ルイスが、われわれのこの世界をとらえたとらえかたに似ている。彼は、この世界の状況を、悪に支配された一種の「内乱」状態であると考えている。「キリスト教は、この宇宙が戦争状態と考える点において、二元論に同意する。しかし、キリスト教は、それが、独立した2つの力の戦争とは見ない。キリスト教は、これが内

乱であり、反乱であり、われわれが、反逆者に占領された宇宙に生きていると考えるのである」⁴³。魔女は、一時的な反逆者に過ぎず、復活したアスランによって、ナルニアは彼女の手から贖い出されるのである。

マルクス・ミューリンクは、裏切りに対して死を要求する古い魔法に関して、「愛は死を要求しうるのか」という問いを立て、自ら愛であろうとしつつ、このように残酷に思われる律法を課す神とは何なのか、神は、人間とこの世界を創造した時に、別の規則を立てることはできなかったのか、と問うている。ナルニアでは、スーザンが、世のはじめからの魔法に対して何か抵抗できることはないのかと、アスランに質問している。アスランは、スーザンの問いに、これが創造主である大帝の法であり、それを破ることはできないことを明らかにすることで答えるのであるが、ミューリンクは、このアスランの答えが、古来から神と善の関係について問われてきた一つの問い、すなわち、善は初めから善であり、神とは無関係に善であるから神は善を望むのか、あるいは、神が望むものであるから、善は善であるのか、との問いに答えていると述べる。彼の読みでは、ここでルイスはこの問いに対して、「神がそのような望みから善は善である」との后者の立場を明確にしている。「もし神がべつのことをのぞんだとするならば、その別のことが善なるものとなったでしょう。[...] 神が望んだものが何であれ、それがつねに善なるもの、つまり律法であったのです」⁴⁴。ミューリンクは、これを補足するように、新プラトン主義で考えられているように善と神を同一と考えるのならば、神と善は無関係ではないと指摘している⁴⁵が、それがこのナルニアでの事例にあてはまるとは述べていない。

しかし、実際はこの、新プラトン主義の考え方がルイスの考えに最も近いものである。ルイスは、神の意思は、神の意思であるからという理由だけでも善であるが、それと同時に、善は善であるから、神の意思となるのだと考えている。彼は、『痛みの問題』(*The Problem of Pain*)で次のように述べている。

我々が命じられることの内容は、必ず、本質的に善である。(有り得ないことながら、もしも)神が命じなかったとしても、せねばならないようなことである。しかし、命令の内容に加えて、神に従うということ自体が、本質的に善なのである⁴⁶。

ナルニアについても、このことはあてはまるであろう。ルイスが、この物語に自分の「人間としての」動機を述べているところからすれば、彼の宗教的信念とこの物語の中に表された思想が反することは考えられないからである。石舞台の魔法は、神が意思したことによって善とされた恣意的な善、あるいは、より悪いことに、神が意思したことによって善とされた残虐さや悪ではなく、本質的な善を含むものだったのである。その善は、すべての裏切りにつき1回、魔女に殺しの権利がある、との文言、魔女の言葉を用いれば、「すべての裏切り者はわらわの合法的な餌食としてわらわのものであり、すべての裏切り行為に対して、わらわは1回の殺しの権利(a right to a kill)をもっている」⁴⁷との言葉に隠されている、創造主なるアスランの愛の意図にある。この魔法は、裏切り者自身が殺されることを定めてはいない。ただ、1回の殺しを要求しているだけである。それゆえ、殺されるのは誰かほかのものでいいのである。そして、アスランは、殺される者が自分になるように、ナルニアの最初から決めていた、すなわち、アスランは自分がエドマンズの身代わりとなって死ぬことを最初

から自らのうえに負っていたのである。そのことは、ナルニアの創造物語である『魔術師の甥』に示されている。ナルニアの創造のとき、すでに、別世界から悪しき魔女がナルニアの世界に入り込んでしまった。そのことからやがて悪いことが起こることを、アスランは予言するのであるが、その時、彼は、「しかし私は、最も悪いことは私自身に降りかかるようにしてあげよう」⁴⁸と言っている。これが、『ライオンと魔女』での身代わりの死のことに言及していることは明らかである。ナルニア国年代記を通して、アスランがこのような受難を経るのはここだけだからである。ナルニアの創造主アスランは、ナルニアの初めから、罪人が自身で罪を贖う代わりにアスラン自らがその罪人の代わりに死ぬことを定めていた。そして、義しい者が罪人の代わりに死んだとき、その死さえ逆戻りすることは、ナルニアの初めより前からあった、永遠の定めだった、つまり、この法の方が、より根源的な法として神の意思を表わすものだったのである。

これらのことから、ナルニアにおけるアスランの贖いが、罪に対して死を要求する神に対して、エドマンズの身代わりになったものである、と考える見方や、この贖いによって神の過酷な法に対して愛の法が勝ったと見る見方が必ずしも最もふさわしいとは言えないように思われる。一見過酷に見える法は、愛の法の一部であり、しかも、過酷な法の求める死は、この世の最初から創造主アスランが受けるようにアスラン自身が計らっていたのだからである。

アスランによるエドマンズの救いは、キリスト教の教義の中では、悪魔の力に堕ちた人間を神の御子であるキリストがその死によって贖い救ったとの見方にもっとも近い。エドマンズは、罪を犯すことによって魔女の手に落ちた。あるいは、自分から魔女の支配下に走ったために、魔女に捕われることとなったのだからである。そして、それをアスランが自分の命によって贖ったのは、文字通り悪魔の手からの救いだったからである。しかも、ナルニアでアスランの復活の後に起こったできごと—アスランは、魔女によって石の像にされていた動物やフォーン、巨人やその他の生き物に息を吹き込んで蘇らせる—は、キリスト教伝承の中で、悪魔から人間を贖って死んだキリストが復活までの3日間、地獄に下ってそこに捕われていた者たちを解放したという、いわゆる地獄下りのキリストという民間信仰の物語と並行する。マクグラスは、アスランの死と復活と、石像の復活に、地獄くだりのキリストのイメージが表れている「特に力強い例」を見ている。「アスランは、[...] 解放した軍勢を引き連れて、かつて大きな要塞だった城の破られた門を出ていき、彼らを自由へと導く。地獄下りがなされ、その住人たちは暗い影の国から解放されたのである」⁴⁹。

そして、エドマンズが裏切りによって、死に値する者となったのは、神の罰というよりも、それによって罪の手（魔女は罪を体現している）に堕ちたのであるから、これはむしろ、これは、コッホの言うような、「閉じた〈行為—結果 構造〉」⁵⁰によって、悪しき行為には内在的に禍とその結果としての罰が含まれており、アスランは、罪は罰を受けることを必然的に伴うという理に対して、その必然的罰を自らが負ったと考えることがより、ふさわしい。アスランの身代わりの死は、その「閉じた〈行為—結果 構造〉」の連鎖を断ち切ることで、エドマンズを救う行為であった、と考えることが出来るであろう。

これは、「身代金」λύτρον の意味の中では、囚人や捕虜を贖う פְּדוּת に近いであろう。特にこれが、罪を犯した本人でもその肉親でもない者による贖いであり、殺される者が誰であろうとも a kill が生じればよいという点ではこれに近い。

また、アスランのエドマンズの贖いは、アスランの復活によって石像の蘇りや、魔女の死、アスランが戴冠させた新たな王による平和な支配につながり、ナルニアの解放、つまりナルニア全土の、魔女の手からの贖いにつながった。この、大きな解放とアスランの平和な国への回復が、アスランの贖罪の、エドモンド個人の贖いをこえたもうひとつ大きな意味である。

注

- 1 C. S. ルイス 『ライオンと魔女』 瀬田貞二訳（東京：岩波書店、1966）。
- 2 C. S. Lewis, *The Lion, The Witch and the Wardrobe* (1950: Penguin Books, Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1959; reprinted, 1976.)
- 3 C. S. Lewis, "Sometimes Fairy Stories May Say Best What's to Be Said," *On Stories and Other Essays on Literature*, ed. W. Hooper (New York: Harcourt, 1982), pp. 45-47.
- 4 C. S. Lewis, *Letters to Children*, ed. Lyle W. Dorsett and Marjorie Lammpp Mead (London: Collins, 1985; paperbacks, 1986), pp. 44-45.
- 5 たとえばスミスも、「彼が意識的に道徳的目的をもって創作を始めたのだとは考えるべきではない」として、「すべては絵で始まった……」という部分のみ引用して、ルイスの言う人間としての動機の方には触れていない。(Robert Houston Smith, *Patches of Godlight: The Pattern of Thought of C. S. Lewis* (Athens: Univ. Of Georgia Press, 1981), p. 143.)
- 6 Lewis, "Fairy Stories May Say Best," pp. 46-47.
- 7 ヘブライ語のアルファベット表記法は断りないかぎり J. Weingreen, *A Practical Grammar for Classical Hebrew*, 2nd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1959), pp. 1-4 の phonetic value を参考にする。
- 8 以上 λύτρον の原義とヘブライ語の3語に対応する意味については cf. O. Procksch & F. Büchsel, "λύω, ἀναλύω, ἐπιλύω, ἐπιλυσις, καταλύω, κατάλυμα, ἀκατάλυτος, λύτρον, ἀντίλυτρον, λυτρόω, λύτρωσις, λυτρωτής, ἀπολύτρωσις," G. Kittel and G. Friedrich eds. *Theological Dictionary of the New Testament (TDNT)*, IV (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1967) のうち Procksch の執筆個所の pp. 328-331.
- 9 Josephus, *Josephus*, with an English trans. Ralph Marcus, vol. VII, *Jewish Antiquities*, Books XII-XIV (Loeb Classical Library) (London: William Heinemann, 1961), XII, § 46. p. 24; Cf. W. Bauer, *Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature*, 3rd ed. (Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1957) p. 605.
- 10 Craig A. Evans, *Mark 8:27-16:20* (Word Biblical Commentary 34B) (Nashville: Thomas Nelson Publishers, 2001), pp. 121-122.
- 11 Anselm of Canterbury, "Why God Became Man," *Why God Became Man and The Virgin Conception and Original Sin*, trans. Joseph M. Collier (New York: Magi Books, 1969), Chs. 23-25, pp. 111-118.
- 12 Anselm, "The Virgin Conception and Original Sin," *Why God Became Man and The Virgin Conception and Original Sin*, Ch. 6. p. 124. で、アンセルムスは、なぜ、キリストだけが罪の贖いをするのか、理由を述べている。
- 13 キリストの地獄下りについては、cf. アリスター E. マクグラス 『総説キリスト教』 本多峰子訳（東京：キリスト新聞社、2008）, pp. 290-292.
- 14 Klaus Koch, "Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?" in James L. Crenshaw ed. *Theodicy in the Old Testament* (Philadelphia: Fortress Press, 1983), pp. 57-87. なお Koch は Weingreen と異なるアルファベット表記法を用いているので、ここではヘブライ語と Weingreen のアルファベット表音表記法に統一した。
- 15 Koch, "Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?" p. 63. 彼が挙げている例は 1:18, 19; 4:17, 18; 5:22, 23; 10:3, 6, 16; 10:29; 12:2, 21, 26, 28; 14:32, 34; 15:25; 16:5, 31; 18:10; 19:17; 20:22; 21:21; 22:4, 22-23; 24:12 である。
- 16 Koch, "Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?" pp. 62, 68 et al.
- 17 Koch, "Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?" p. 67.

- 18 עֲקֵב עֲנָהּ יִרְאַת עֲשֶׂר וְכִבְדֹּרְחַיִּים
邦訳新共同訳では「主を畏れて身を低くすれば、富も名誉も命も従って来る。」RSVは“The reward for humility and fear of the LORD is riches and honor and life.”となっている。
- 19 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” p. 62.
- 20 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” pp. 75-76.
- 21 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” p. 77.
- 22 山我哲雄「歴代誌上・下」『新共同訳旧約聖書注解 I、創世記－エステル記』（東京：日本基督教団出版局, 1996), p. 665.
- 23 Koch が言及している個所でのヘブライ語原語は、עֲקֵב (主に、カル形男性単数命令形で)、LXX 訳では、μῦμιήσκομαι 主に主ヤハウェに対してアオリスト単数 2 人称命令形で) となっている。
- 24 ゲルハルト・フォン・ラート『旧約聖書神学 I』荒井章三訳（東京：日本基督教団出版局, 1980), pp. 350-351.
- 25 フォン・ラート『旧約聖書神学 I』, p. 499.
- 26 Jay Sklar, *Sin, Impurity, Sacrifice, Atonement: The Priestly Conceptions* (Hebrew Bible Monographs 2) (Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2005), p. 9, footnote 1 は、「創世 6:5-7; 19:13-14、出エジプト 32:1-10、レビ 10:1-3; 18:25; 26:14-33、民数 11:1; 12:9-11; 14:11-12, 22-23, 28-37; 16:25-35; 21:5-6、申命 4:25-28; 6:14-15; 7:4; 28:15-68、士師 2:13-15; 3:7-8、サムエル上 2:27-32、サムエル下 12:9-14、列王上 2:32; 8:31-40; 9:6-9; 11:9-11、列王下 17:6-18、歴代上 21:1-15、歴代下 7:13-14、エズラ 9:13-14、ネヘミヤ 9:26-28、詩編 5:11 (10); 11:5-6、箴言 12:2、イザヤ 3:16-17; 9:13-14; 10:5-6、エレミヤ 3:1-3a; 4:4; 5:3、哀歌 3:42-47、エゼキエル 7:3, 8-9; 11:6-12; 14:7-8; 22:4, 13-15、ホセア 1:4-5; 2:10-15 (8-13); 8:13b-14; 10:1-2、アモス 1:3-2:5; 3:2、ミカ 1:3-7; 6:13-16、ゼファニア 1:2-6」を Klaus Koch が否定している divine retribution が実際にはあるとの反証としてあげている。
- 27 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” pp. 62, 68 et al.
- 28 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” pp. 57-67.
- 29 F. Brown, S. R. Driver & C. A. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon* (Peabody, Mass.: Hendrickson, 1997), p. 145. (נָסָא 2 の意味)。
- 30 フォン・ラート『旧約聖書神学 I』, p. 242.
- 31 Lewis, *Lion*, p. 128.
- 32 Lewis, *The Voyage of the Dawn Treader* (1952; London: Penguin, 1965; rpt. 1976), p. 136.
- 33 Evan K. Gibson, *C. S. Lewis: Spinner of Tales* (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1980), pp. 144-145.
- 34 Gibson, p. 145.
- 35 Gibson, p. 145.
- 36 Gibson, p. 145.
- 37 Martha C. Sammons, *A Guide through Narnia* (London: Harold Shaw, 1979), p. 124.
- 38 Donald E. Glover, *C. S. Lewis: The Art of Enchantment* (Ohio: Ohio Univ. Press, 1981), p. 142.
- 39 Gibson, p. 144.
- 40 Lewis, *Lion*, p. 129.
- 41 Lewis, *Lion*, p. 148.
- 42 C. S. Lewis, *A Preface to 'Paradise Lost'* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1942; paperbacks, 1960; rpt. 1979), p. 95.
- 43 C. S. Lewis, *Mere Christianity* (1952; London: Collins, 1955; paperbacks, 1977), p. 47.
- 44 マルクス・ミューリンク『C・S・ルイス「ライオンと魔女」の謎を解く』上田彰、久保田浩、小泉健訳（大阪：創元社, 2006), p. 171. (原著 Markus Mühling, *Gott kund die Welt in Narnia, Eine theologische Orientierung zu C. S. Lewis' "Der König von Narnia"* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2005).)
- 45 ミューリンク, p. 172.
- 46 C. S. Lewis, *The Problem of Pain* (1940; London: Collins, 1957; paperbacks, 1977), pp. 88-89.
- 47 Lewis, *Lion*, p. 128.
- 48 Lewis, *The Magician's Nephew*. (1955; London: Penguin, 1963; rpt. 1976), p. 126.
- 49 マクグラス『総説キリスト教』, p. 292.
- 50 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” pp. 62, 68 et al.